

目次

論文

西アジア都市形成期の土器焼成技術

—分析方法の提案と焼成温度・彩文顔料の考察—

小泉 龍人 1

エジプト中王国時代のミニチュア土器使用に見られる「単位」について

矢澤 健 23

研究ノート

骨角器インダストリーに見る新石器化の一側面

—技術選択と原材料からの検討—

新井 才二 47

資料紹介

初期イスラーム時代のファイユーム陶器

—ベナキ博物館所蔵資料から—

長谷川 奏 57

動向

アルメニアの文化遺産分野における日本の国際協力

有村 誠・藤井 純夫 61

紀元前5千年紀イランをテーマとした国際ワークショップ

三木 健裕 69

イラン、テヘラン大学で開催された「若手考古学者国際会議」に参加して

安倍 雅史・三木 健裕 75

米国オリエント学会 2013 年大会

近藤 康久 79

報告

日本西アジア考古学会 2012 年度ワークショップ A「西アジア青銅器時代の葬制」報告

久米 正吾 83

西アジア考古学関連学術論文・出版物

87

西アジア発掘調査報告会報告一覧・調査彙報

93

投稿規定・執筆要項

95

編集後記

日本西アジア考古学会 2012 年度ワークショップ A 「西アジア青銅器時代の葬制」報告

久米 正吾

2012 JSWAA Workshop A: "Mortuary Practices of the Bronze Age in Western Asia"

Shogo KUME

2012 年度より新たに日本西アジア考古学会（以下、本学会）で企画された「ワークショップ」は、会員からの自由な発想に基づき、会員独自の研究発表の場を立案・運営ができるという趣旨の公募制の研究集会開催制度である。常勤の所属先あるいは研究費を有さない会員、特に若手にとっては独自の研究会を企画したくても単独では会場の確保すらままならない、というのが現状であろう。そのような中で本ワークショップ制度を利用すれば、本学会主催の事業として自らの研究成果公表や公開討論の場を設けることができる。かつ補助金も支給される。このような内容の本学会からの提案がとても魅力的に映った筆者は、「メソポタミア青銅器時代の葬制」という仮題目でワークショップ公募にいち早く応募させていただくこととなった。

幸い、筆者の企画は採用との通知を後日受けた。ただし、採用にあたっての条件として同テーマの連続ワークショップを 3 回以上実施する旨の通知も同時に受けた。本来、筆者の企画では複数の発表者が研究発表を行うワークショップを 1 回のみ実施する計画であった。しかし、以前本学会で実施されていた「定例研究会」の流れをくむ本ワークショップ制度では、共通テーマで複数回の研究集会を開催することが求められていたのである。筆者にそのような連続ワークショップを企画する力量はなく思案していたところ、その状況を知った足立拓朗氏（金沢大学准教授）と須藤寛史氏（岡山市立オリエン特美術館主任学芸員）が助け舟を出してくれた。ワークショップの題目を「西アジア青銅器時代の葬制」と改め、東京、金沢、岡山の各会場でそれぞれメソポタミア地域、南レヴァント地域、アナトリア地域の青銅器時代の葬制に関する連続 3 回のワークショップを開催する運びとなったのである（図 1）。金沢と岡山で急遽ワークショップの企画立案と世話人を務めてくださった足立氏と須藤氏には改めてこの場を借りて御礼申し上げたい。また今回のワークショップが以上のような経緯により開催され、足立氏、須藤氏と筆者の 3 人が共同で代表を務めていたことを会員各位にまずはご了解いただきたく思う。

「メソポタミア青銅器時代の葬制」と題して東京で開催した第 1 回目のワークショップでは、筆者が中心となって研究をすすめているシリア前期青銅器時代墓地遺跡における墓前儀礼の考古学的実証が中心課題となった。特に楔形文字資料が示す「キスプ」(*kispu*) と呼ばれる生者と死者との共飲共食を伴う定期的な死者供養の実態復元に向けて、考古学的及び理化学的証拠がいかに寄与するか、という趣旨のワークショップであった。まず、楔形文字資料が記録するキスプとは何か、国際的にみてもキスプ研究に先駆的な仕事をなされた月本昭男氏（立教大学教授）からレクチャーを受けた。その後、墓地遺跡の考古学的証拠、墓地周辺の踏査記録、植物遺存体分析、副葬土器付着物の同位体分析など、各方面の専門家がそれぞれの見地からのキスプ儀礼の考古学的復元の可能性について議論した。1 つの結論としては、キスプ儀礼を考古学的に復元することは極めて困難な課題である、ということがある。仮に墓から食物に関する考古学的証拠が確認されたとしても、それがキスプ儀礼の脈絡の中で考古記録となりえたか否か、実証することはほぼ不可能だからである。しかし、複数の考古学的証拠を揃えることによって、墓地で執り行われた様々な葬送儀礼全体の中の一部としてキスプが存在していた可能性については考古学的に指摘できるのではないかと、いう手ごたえは感じた。そのような動機に基づいて、本ワークショップでの成果の一部を 2013 年 6 月に東京大学で開催された本学会の大会において本ワークショップで研究発表を行った 3 名の共同研究者と連名で口頭発表させていた。

金沢で開催された第 2 回ワークショップ「南レヴァント青銅器時代の葬制」では、藤井純夫氏（金沢大学教授）を中心に 1990 年代から調査が実施されてきた青銅器時代ヨルダン南部の葬制の総括的報告がなされた。また、近年調査が開始されたサウジアラビアでのケルン墓調査についての最新成果が披露された。以上のようなヨルダンとサウジアラビアでの考古学的証拠を軸に、青銅器時代の砂漠地帯での遊牧民葬制の特徴とアラビア半島への遊牧の展開につ

第1回ワークショップ：メソポタミア青銅器時代の葬制

2012年12月8日(土) 於：国士舘大学世田谷キャンパス

- ・月本昭男(立教大学) 死者供養(*kispu(m)*)からみた死生観
- ・久米正吾(東京文化財研究所/国士舘大学) 古代メソポタミアの死者祭宴は考古学的に明らかにできるか? - *kispu* 儀礼研究の現状と課題 -
- ・門脇誠二(名古屋大学) 墓前儀礼としての石器づくり? - ユーフラテス河中流域における青銅器時代墓地と石器散布の空間関係 -
- ・赤司千恵(早稲田大学) シリア青銅器時代集落と墓地出土の植物遺存体分析に基づく当時の食用植物と調理について
- ・宮田佳樹(名古屋大学[当時、現金沢大学]) 考古学における同位体分析や脂質分析の可能性 - ワディ・ダバ墓域出土試料の化学分析結果と墓地葬宴の実証可能性を事例として -

第2回ワークショップ：南レヴァント青銅器時代の葬制

2013年2月16日(土) 於：金沢大学角間キャンパス

- ・足立拓朗(金沢大学) サウジアラビア北西部、タブーク州におけるケルン墓群調査
- ・藤井純夫(金沢大学) 南ヨルダン、ジャフル盆地における葬制

第3回ワークショップ：中央アナトリア、キュルテペ遺跡の葬制

2013年3月16日(土) 於：岡山市立オリエント美術館

- ・紺谷亮一(ノートルダム清心女子大学) カイセリ県遺跡調査プロジェクト(KAYAP)について
- ・フィクリ・クラックオウル(アンカラ大学) 青銅器時代の交易都市キュルテペ(古代カニシュ)とその葬制
- ・山口雄治(徳島大学) 前期青銅器時代、中央アナトリアの葬制
- ・須藤寛史(岡山市立オリエント美術館) 中期青銅器時代、中央アナトリアの葬制

図1 東京、金沢、岡山で開催された各ワークショップのプログラム

いて議論がなされた。

岡山では、「中央アナトリア、キュルテペ遺跡の葬制」と題し第3回ワークショップを実施した。まず、紺谷亮一氏(ノートルダム清心女子大学教授)を中心として実施されているトルコ、カイセリ県での踏査成果についてその概要報告がなされた。また、訪日中のフィクリ・クラックオウル(Fikri Kulakoğlu)氏(アンカラ大学教授)からは、氏が調査を指揮する交易都市キュルテペ(Kültepe)遺跡における葬制について包括的な報告がなされた(図2)。これらのキュルテペ遺跡を中心とする中央アナトリアでの最新成果のほか、その他のアナトリア地域での前・中期青銅器時代の葬制について詳細な情報提供がなされ、中央アナトリアのみならずアナトリア地域全体での葬制に関して議論が広がった。

以上が東京、金沢、岡山の各会場で行われた3回のワークショップの概要である。本来ならば、メソポタミア地域、南レヴァント地域、アナトリア地域の青銅器時代葬制

の各特徴を比較した総括的な報告がここでなされるべきであろうが、筆者の力量不足につきそれはどうかご寛恕いただきたく思う。むしろ、本学会のワークショップ制度を初めて利用させていただいた者として、本制度の今後の展開に向けて、やや気になった点を述べさせていただきたい。

まず1つは、最近になって本学会大会の「ミニシンポジウム」や日本オリエント学会大会の「企画セッション」など、名称は異なるものの今回の「ワークショップ」と類似した形態の研究集会枠が設けられ始めたことである。ワークショップ、ミニシンポ、セッションと研究集会を企画する側に選択肢が増えたことはもちろん大歓迎である。一方、別組織である日本オリエント学会はともかく、本学会主催事業の中に類似した研究集会枠が複数存在するのは、研究集会を企画する側としてはその選択にやや戸惑いを覚えるかもしれない。あるいは、冒頭に述べた今回のワークショップ開催の経緯からおわかりいただけるように、本来、本ワークショップ制度ではミニシンポなど他の企画と



図2 岡山市立オリエント美術館で開催した第3回ワークショップでの総合討論(左から紺谷亮一氏、フィクリ・クラックオウル氏、やや離れて須藤寛史氏)

差別化を図ることが求められていたにもかかわらず、今回筆者が企画したワークショップの構成内容がそれに十分に対応するものでなかったのかも知れない。その点はお詫び申し上げたい。

もう1点、およそ厚かましいかも知れないが、より充実した経費措置をいただけると多くの会員の関心を集められ

るように思う。今回の補助金額は合計で約3万円であったため、例えば遠方からの発表者の招聘費用は、実際には各世話人が参加しているプロジェクト経費で賄うなど、他の予算と連動してワークショップが開催された。参加するプロジェクトの研究代表者から支援を受けられた筆者らは幸運であったが、もしそのような支援を得られない会員の場合、優れた企画を構想してもワークショップ募集への応募をためらうかも知れない。

やや苦情ばかりを述べすぎたかもしれないが、筆者にとっては本学会のワークショップ制度を利用させていただいたことにより、ワークショップ自体は必ずしも熟練した運営ではなかったかも知れないが、自身の研究を次の段階へと進めることが可能となったし、成果公表の場も得ることができた。末筆ながら、本ワークショップ制度の企画立案をされた本学会前会長の藤井純夫氏をはじめその他役員の方々、事務局の田尾誠敏氏に御礼申し上げたい。また東京、金沢、岡山での各会場の手配、研究発表者招聘等にご尽力いただいた大沼克彦氏(国士舘大学教授)、藤井純夫氏、紺谷亮一氏に、各会場の世話人を代表して御礼申し上げます。最後に、各会場に足を運んでくださり貴重なコメントをくださった参加者の方々に御礼申し上げます。

久米 正吾
東京文化財研究所
Shogo KUME

National Research Institute for
Cultural Properties, Tokyo